

K-760

# 山形市埋蔵文化財調査年報

－平成17年度－

2007

山形市教育委員会

# **山形市埋蔵文化財調査年報**

**－平成17年度－**

平成19年3月

**山形市教育委員会**



## 序

山形市は山形盆地の南部に位置し馬見ヶ崎川や藏王連峰など水と緑に恵まれた自然豊かな環境にあります。東の奥羽山脈には平安時代以降慈覚大師の開基と伝わる国指定名勝・史跡「山寺」が所在し、市内の中心部には戦国武将最上義光の居城であった国指定史跡「山形城跡」が所在するなど、山形県内はもとより東北の中心的地域として古くから栄えてきました。

市内には国指定史跡「鳴遺跡」など埋蔵文化財と呼ばれる地中に埋もれた文化財が380箇所以上確認されております。これらの文化財は郷土の歴史や文化を理解する上で欠くことのできない市民共有の歴史的財産となっています。

こうした状況のもと近年は市内各所において住民福祉の向上を目的とした各種社会整備に関する開発事業が増加しており、埋蔵文化財保護との調整の結果、遺跡の発掘調査に至る場合が多くなっています。また国指定史跡「山形城跡」などの保存や整備を目的とした発掘調査も継続されているところです。

本書は平成17年度に実施された発掘調査の概要をまとめたものです。埋蔵文化財の保護と啓蒙のために、そして皆様の郷土史探求の一助としてご活用いただければ誠に幸いです。

最後になりましたが、調査にあたって埋蔵文化財の保護に特段のご理解をいただき発掘調査に多大なご協力をいただきました事業者や工事関係者の皆様並びに関係各位に厚く御礼申し上げます。

平成19年3月

山形市教育委員会  
教育長 大場 登

## 例　　言

- 1 本書は平成17年度に山形市教育委員会が実施した埋蔵文化財調査の総括したものである。
- 2 表面踏査・試掘調査・立会調査については本書をもって報告とし、発掘調査については今後報告書を作成する予定のあるものについては略述するにとどめた。また既に報告書が刊行されているものについては割愛した。
- 3 本書の作成・執筆（付録を除く）は、五十嵐貴久・植松薰・須藤英之・國井修が担当した。編集は國井修が担当した。
- 4 出土遺物、調査記録類については、山形市教育委員会が一括保管している。
- 5 付録として国立歴史民俗博物館年代測定研究グループが実施した山形西高敷地内遺跡出土試料の<sup>14</sup>C年代測定についての報告を掲載した。

## 凡　　例

- 1 本書で使用した地形図等は以下の通りである。

- 第1図 国土地理院発行 1:25,000地形図「山形北部」(NJ-54-21-11-3)・「山形南部」(NJ-54-21-11-4)を1:75,000に縮小。
- 第4図 山形市発行 1:2,500国土基本図 X-QC 38-4 (山形広域都市計画図「江俣」)を1:5,000に縮小。
- 第6図 山形市発行 1:2,500国土基本図 X-QC 67-2 (山形広域都市計画図「漆房」)を1:5,000に縮小。
- 第7図 山形市発行 1:10,000「山形広域都市計画図 7」
- 第8図 山形市発行 1:2,500国土基本図 X-QC 68-3 (山形広域都市計画図「黒沢」)を1:5,000に縮小。
- 第10図 山形市発行 1:2,500国土基本図 X-QC 48-2 (山形広域都市計画図「下条町」), 49-1 (山形広域都市計画図「宮町」)を合成。
- 第11図 山形市発行 1:2,500国土基本図 X-QC 49-1 (山形広域都市計画図「宮町」), 49-3 (山形広域都市計画図「七日町」)を合成。
- 第12図 山形市発行 1:2,500国土基本図 X-QC 49-3 (山形広域都市計画図「七日町」)
- 第13図 山形市発行 1:2,500国土基本図 X-QC 58-2 (山形広域都市計画図「南館」), 59-1 (山形広域都市計画図「鉄砲町」)を合成。
- 第14図 山形市発行 1:2,500国土基本図 X-QC 67-2 (山形広域都市計画図「漆房」), 68-1 (山形広域都市計画図「谷柏」)を合成し, 1:10,000に縮小。

- 2 造構番号は現地調査段階での番号を踏襲している。
- 3 造跡概要図・造構配置図中の方位は原則として座標北を示しているが、一部任意のものがある。
- 4 造構実測図中の標高は海拔を基準とする。

## 目 次

### I 埋蔵文化財保護の動向

1 平成17年度の調査概況 ..... (國井修) ..... 1

### II 調査の概要

1 史跡 山形城跡 ..... (五十嵐貴久) ..... 6

2 表面踏査・試掘調査・立会調査 ..... (植松薰・須藤英之・國井修) ..... 13

(1) 梅野木前1遺跡 ..... (7) 山形城三の丸跡 (木の実町12番地地点)

(2) 国指定史跡 鳩遺跡 ..... (8) 山形城三の丸跡

(3) 長谷堂城跡 ..... (幸町7番15号・幸町18番地地点)

(4) 成沢城跡 ..... (9) 鉄砲町一丁目遺跡

(5) 秋葉山経塚 ..... (10) 谷柏古墳群

(6) 城北遺跡・山形城三の丸跡

(城北町二丁目9番地地点)

付編 山形県山形市山形西高敷地内遺跡出土資料の<sup>14C</sup>年代測定

..... (小林謙一・坂本稔・新免敬緒・武田和宏・松崎浩之) ..... 25

## 表

表1 平成17年度埋蔵文化財調査一覧 ..... 3

表3 新規登録・変更遺跡一覧 ..... 5

表2 埋蔵文化財発掘調査報告書一覧 ..... 5

## 挿 図

第1図 調査地点位置図 ..... 2

第2図 史跡山形城跡

平成17年度発掘調査位置図 ..... 11

第3図 史跡山形城跡二の丸旧震城市民テニス

コート跡地区調査位置・断面図 ..... 12

第4図 梅野木前1遺跡調査概要図 ..... 13

第5図 国指定史跡鳩遺跡調査概要図 ..... 15

第6図 長谷堂城跡調査概要図 ..... 16

第7図 成沢城跡調査概要図 ..... 17

第8図 秋葉山経塚周辺遺跡位置図 ..... 18

第9図 秋葉山経塚調査概要図 ..... 18

第10図 城北遺跡・山形城三の丸跡 (城北町

二丁目9番地地点) 調査概要図 ..... 19

第11図 山形城三の丸 (木の実町12番地地点)

調査概要図 ..... 20

第12図 山形城三の丸 (幸町7番15号・

幸町18番地地点) 調査概要図 ..... 21

第13図 鉄砲町一丁目遺跡調査概要図 ..... 22

第14図 谷柏古墳群墳丘位置図 ..... 24

## 第Ⅰ章 埋蔵文化財保護の動向

### 1 平成17年度の調査概況

平成17年度は、3件の発掘調査、21件の試掘調査、6件の立会調査、2件の表面踏査を実施した。実施した調査の一覧を表1に示した。

発掘調査では、国指定史跡山形城の整備事業に伴う発掘調査、市道嶋西通り線に伴う梅野木前1遺跡の緊急発掘調査、市道橋山小学校正門線道路改良工事に伴う北向遺跡の緊急発掘調査を実施した。緊急発掘調査については、一部もしくは全部について民間発掘調査会社に委託して実施した。

試掘調査では、宅地造成、共同住宅建設等に伴う調査を実施した。これらの調査によって鉄砲町一丁目遺跡及び城北遺跡を新規に登録した。

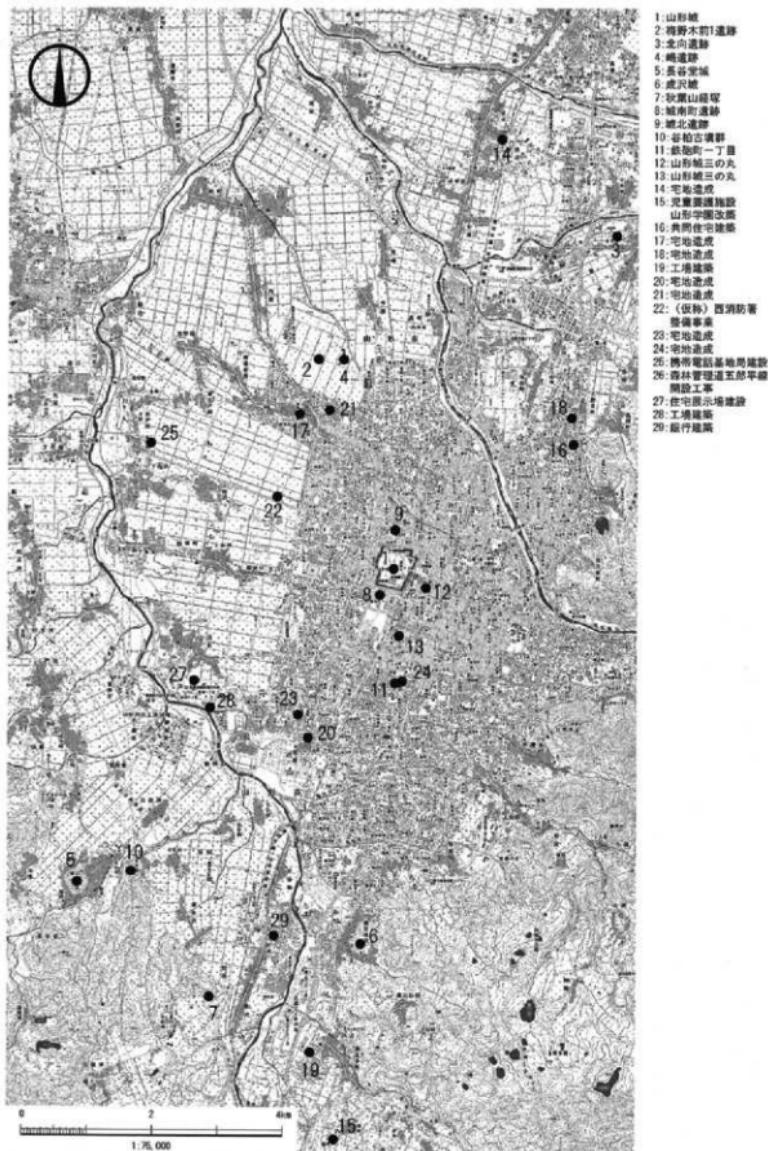
立会調査では、市道改良工事に伴い梅野木前1遺跡、公園整備事業に伴い長谷堂城及び成沢城、神社改築に伴い秋葉山経塚、山形駅西土地区画整理事業に伴い城南町遺跡の調査を実施したほか、宅地造成に伴う調査を実施した。秋葉山経塚の調査では神社下から近世以降の不動明王像が発掘されたが、これまで伝えられてきた経塚に係る遺物やそれらを再埋納した痕跡は全く確認されなかった。

表面踏査では谷柏古墳群の調査を実施した。指定地外の地点、過去に谷柏古墳群A地点と呼称された部分について調査を実施し、新たに数基の墳丘と推定される地形が確認された。そのほか林道整備にかかわり表面踏査を実施した。事業予定地に埋蔵文化財は所在しないが、事業地脇に板碑が2基存在することが確認された。

整理作業では上記の山形城跡の整理作業を前年度以降継続して行ったほか、梅野木前1遺跡、城南町遺跡の整理作業を実施した。また北向遺跡については民間発掘調査会社に委託して作業を実施した。梅野木前1遺跡、城南町遺跡及び北向遺跡については報告書を刊行した。平成17年度をもって、山形駅西土地区画整理事業に伴い実施した双葉町遺跡及び城南町遺跡の緊急発掘調査に係る報告書は全て刊行された。

平成17年度における開発に係る事業調整では、民間による埋蔵文化財の照会が延べ381件あり、そのうち開発事業に係るもののが133件あった。これら開発のうち、共同住宅建設及び携帯電話基地局建設に係るもののがその半数を占め、昨年来より携帯電話基地局建設に係る照会が増加傾向にある。事業規模等から試掘調査などの調査を実施したものは14件で、主に宅地造成に係るものである。宅地造成事業は、近年までは市街地の縁辺や市街地外において行われることが多かったが、平成16年度あたりから市街地内の空閑地や農地を利用して計画・実施されるものが多くなった。そのため開発面積も以前よりも小規模となり、試掘調査を行った開発事業では約4000m<sup>2</sup>を最大規模とする。共同住宅建築や携帯電話基地局建設に係る調査では、事業規模から不時発見時の際の手続きや慎重工事としているものが多い。

なお、これまで本市で刊行した埋蔵文化財発掘調査報告書は表2の通りである。また、遺跡の新規発見については表3の通りである。



第1図 調査地点位置図

表1 平成17年度埋蔵文化財調査一覧

No.	遺跡名	調査地	事業名	調査区分	県道跡番号 (中世城館 遺跡番号)	調査期間	調査面積 (m <sup>2</sup> )	担当者	備考
1	山形城	酒城町3他	史跡山形城跡 本丸大手門復元整備事業	発掘調査	1 (201-001)	2005/ 6/27~11/30 2005/ 12/12~28	1,350	五十嵐貴久	国指定史跡
2	梅野木前 1	大字梅野木 前	市道西脇通り 道路改良工事	試掘調査	平成3年度 新規	2005/6/27	植松 薫		
				発掘調査		2005/10/3~31	185	植松 薫 山武考古学 研究所	
				立会調査		2006/1/12 2006/3/10~11		植松 薫	
3	北 向	大字青柳字 一本木	市道桶山小学校 正門隣道路 改良工事	試掘調査	平成13年度 新規	2005/9/8	植松 薫 須藤 英之 國井 修 武田 陽輔 福口 有美		
				発掘調査		2005/10/31~12/28	900	山武考古学 研究所	
4	島	大字島	防火水槽設置	試掘調査	4	2006/ 3/22~31	國井 植松 薫 須藤 英之 本木 伸宏		国指定史跡 調査地点は指定 地外
5	長谷堂城	大字長谷堂 字城山	公園造成	立会調査	104 (201-011)	2005/ 9/30,10/3~4, 10/7,10/27, 12/7	植松 薫 須藤 英之 國井 修 福口 有美		軽微な工事
6	成沢城	蘿王成沢字 船山	公園造成	立会調査	63 (201-014)	2005/ 10/14,10/17, 11/11,12/16	植松 薫 須藤 英之 國井 修 福口 有美		軽微な工事
7	秋葉山 城	大字松原	神社改築	立会調査	平成8年度 新規	2005/5/24	須藤 英之	福岡は確認でき ず	
8	城南町	城南町	山形駅西土地 区画整理事業	立会調査		平成9年度 新規	國井 修	調査地点につい ては埋蔵文化財 は既に損壊	
9	城北 山形城 三の丸	城北町二丁 目	(仮称)山形 市立第七小学校 校舎改築工 事	試掘調査	平成17年度 新規 平成7年度 新規 (201-003)	2005/8/9	植松 薫 須藤 英之	新規発見	
10	谷 古墳群	大字谷柏字 上ノ山	史跡現状確認	表面踏査		2005/10/17 2005/12/7	茨木 小野 國井 光裕 徹修	指定地外を踏 査・墳丘らしき 痕跡を確認	
11	鉄砲町 一丁目	鉄砲町一丁 目	共同住宅建設	試掘調査	平成17年度 新規	2005/7/28	植松 薫 須藤 英之	新規発見	
12	山形城 三の丸	木の実町	共同住宅建設	試掘調査	平成7年度 新規 (201-003)	2005/5/17	植松 薫 須藤 英之	調査地点につい ては埋蔵文化財 は既に損壊	
13	山形城 三の丸	幸町	都市計画道路 事業十日町双 葉町線整備事 業	試掘調査	平成7年度 新規 (201-003)	2005/6/21	植松 薫 須藤 英之	調査地点につい ては埋蔵文化財 は既に損壊	
14		大字漆山	宅地造成	試掘調査		2005/4/20	植松 薫	埋蔵文化財は所 在しない	
15		蔵王上野	児童養護施設 山形字園改築	試掘調査		2005/6/6	植松 薫 須藤 英之	埋蔵文化財は所 在しない	
16		鈴川町三丁 目	共同住宅建設	試掘調査		2005/6/22	植松 薫 須藤 英之	埋蔵文化財は所 在しない	
17		陣場一丁目	宅地造成	試掘調査		2005/6/23	植松 薫 須藤 英之	埋蔵文化財は所 在しない	

No.	遺跡名	調査地	事業名	調査区分 (中世城館 道路番号)	調査期間	調査面積 (m <sup>2</sup> )	担当者	備考
18		大野目一丁目	宅地造成	試掘調査		2005/7/8	植松 須藤	薫 英之
19		表蔵王	工場建設	試掘調査		2005/7/13	植松 須藤	薫 英之
20		大字南館	宅地造成	試掘調査		2005/8/3	植松 國井	薰 修
21		江保四丁目	宅地造成	試掘調査		2005/8/10	國井 武田 樋口	修 輪有美
22		西崎	(仮称)西酒 防署整備事業	試掘調査		2005/ 8/23・24	植松 須藤 國井 武田 樋口	薰 英之 修 輪有美
23		南館四丁目	宅地造成	試掘調査		2005/9/28	須藤 國井 武田	英之 修 輪有美
24		鉄砲町一丁目	宅地造成	立会調査		2005/10/8	須藤	英之
25		上江	携帯電話アン テナ建設	試掘調査		2005/11/21	植松 國井	薰 修
26		山寺	森林管理道五 郎平線開設工 事	表面踏査		2005/11/30	植松 國井	薰 修
27		松栄二丁目	住宅展示場建 設	試掘調査		2006/1/27	國井 樋口	修 輪有美
28		松栄一丁目	工場建設	試掘調査		2006/1/30	國井 樋口	修 輪有美
29		大字松原	銀行建設	試掘調査		2006/2/28	植松 國井	薰 修

表2 埋蔵文化財発掘調査報告書一覧

集番号	報告書名	発行年月日	発行機関	備考
1	熊ノ前遺跡第1次発掘調査報告書	1975/5	山形市教育委員会	
2	熊ノ前遺跡第3次発掘調査報告書	1978/11	山形市教育委員会	
3	山形城跡発掘調査報告書	1981/3	山形市教育委員会	本丸及び二の丸部分
4	菅沢二号墳発掘調査報告書	1987	山形市教育委員会	
5	菅沢2号墳	1991	山形市教育委員会	
6	鳴瀬跡発掘調査概報	1994	山形市教育委員会	範囲確認調査の報告
7	馬上台遺跡発掘調査報告書	1995/3	山形市教育委員会	
8	山形城本丸発掘調査概報	1996/3	山形市教育委員会	平成6・7年度調査概報
9	中野I遺跡・中野II遺跡発掘調査報告書	2001/3/31	特殊法人日本勤労者住宅協会 山形県労働者住宅生活協同組合 山形市教育委員会	店舗建設に伴う発掘調査報告書
10	吉原I遺跡発掘調査報告書	2001/3/31	株式会社カワチ薬品 山形市教育委員会	店舗建設に伴う発掘調査報告書
11	吉原III遺跡発掘調査報告書	2001/3/31	株式会社東北ケーブル電気 山形市教育委員会	店舗建設に伴う発掘調査報告書
12	一ノ坪遺跡発掘調査報告書	2001/11/30	山形市教育委員会 山武考古学研究所	
13	吉原VI遺跡発掘調査報告書	2002/3/31	東北ミサワホーク 松田建設株式会社 山形市教育委員会	
14	石田遺跡上谷柏遺跡発掘調査報告書	2002/6/30	東北電力株式会社 東北用地株式会社 山形市教育委員会	
15	山形城三の丸跡(山形市立第一小学校敷地内)発掘調査報告書	2003/3/31	山形市教育委員会	
16	吉原II遺跡第3次発掘調査報告書	2003/3/31	株式会社二ラク 山形市教育委員会	店舗建設に伴う発掘調査報告書
17	双葉町遺跡(山形城三の丸跡)発掘調査報告書(近世編)	2004/3/31	山形市教育委員会	
18	山形西高砂地内遺跡発掘調査報告書	2004/3/31	山形市教育委員会 山武考古学研究所	
19	吉原遺跡群発掘調査報告書	2004/3/31	吉原土地区画整理組合 山形市教育委員会	吉原土地区画整理事業に伴う調査報告書
20	觀音堂遺跡発掘調査報告書	2004/3/31	芸工大前土地区画整理組合 山形市教育委員会	
21	成沢西遺跡発掘調査報告書	2004/3/31	成沢土地区画整理組合 山形市教育委員会	
22	河原田遺跡・梅野木前2遺跡発掘調査報告書	2004/3/31	鶴土地区画整理組合 山形市教育委員会	
23	南志田遺跡発掘調査報告書	2005/3/31	東南タクシースタジオ 山形市教育委員会	
24	双葉町遺跡(山形城三の丸跡)発掘調査報告書 純文時代～中世編	2005/3/31	山形市教育委員会	
25	双葉町遺跡城南町遺跡(山形城三の丸跡)発掘調査報告書	2006/3/31	山形市教育委員会	
26	梅野木前1遺跡発掘調査報告書	2006/3/31	山形市教育委員会	
27	北向遺跡発掘調査報告書	2006/3/31	山形市教育委員会 山武考古学研究所	

表3 新規登録・変更遺跡一覧

遺跡名	所在地	遺跡番号	変更内容	1:25,000地形図	地形図番号	備考
鉄砲町一丁目	鉄砲町一丁目	平成17年度新規	新規発見	山形南部	NJ-54-21-11-4	
城北	城北町二丁目	平成17年度新規	新規発見	山形北部	NJ-54-21-11-3	F山形県遺跡名 吉J(3933年発行) 遺跡番号:498
梅野木前1	大字梅野木前	平成3年度新規	範囲の変更	山形北部	NJ-54-21-11-3	

## 第Ⅱ章 調査の概要

### 1 史跡 山形城跡

#### (1) 調査要項

遺跡番号 県遺跡番号1 遺跡略号 KJO 所在地 山形市霞城町3番地（霞城公園）

調査原因 史跡整備事業 調査面積 1,350m<sup>2</sup>

調査期間 C調査 2005/6/27～11/30, 2005/12/12～28 調査担当者 五十嵐貴久

#### (2) 調査の経緯

山形城跡は、昭和61（1986）年に国史跡指定を受け、平成3（1991）年には「二の丸東大手門」の復原が完了した。その後、整備事業計画に基づき本丸整備の基礎資料を得る目的で発掘調査が進められてきた（武田1996『山形城跡本丸堀発掘調査概報』山形市教育委員会）。平成8年から15年までは本丸大手門周辺の発掘調査を実施（石垣復原工事は平成10年から15年）し、継続して本丸堀跡・土塁の調査及び復原事業を進めている。平成17年度は本丸（東・南）堀跡、本丸東土塁跡の発掘調査を実施した。また、二の丸は既存施設撤去等に伴い旧霞城市民プール跡地・旧霞城市民テニスコート跡地の2地区で造構確認調査を継続実施した（第2図参照）。

#### (3) 遺跡の概観

山形城跡は蔵王山系を源とする馬見ヶ崎川扇状地の扇端部湧水帯にあり、市街地のほぼ中央に位置する。南北朝期の延文2（1356）年、足利一門の斯波氏により築かれたと伝わる。初代城主は斯波兼頼で後に最上氏を名乗り第11代最上義光の文禄・慶長期（1592～1614年）に最大57万石の領国を支配し、三の丸までの輪郭式の城と城下町の町割りを築いたと言われている。その後、元和8（1622）年鳥居氏が入部の頃に本丸・二の丸内を改修したと伝えられ、現在の二の丸の形に整えられた。城跡は馬見ヶ崎川の氾濫による砂礫層を基盤とした平地に立地しており、氾濫等による河川砂と腐食質土層との互層状の堆積層が上位に存在し、下層は砂礫層が厚さ約4m堆積する状態で、本丸堀の法面（側面）を支持するのもこの砂礫層である。二の丸は周囲の堀・土塁が現況で残るほか、虎口部分のみ石垣を用いた様式は比較的良好に保存されている。しかし、郭内は現在文化・体育施設等が配備され、特に本丸堀・土塁は明治時代に旧陸軍の兵営地になる際、破壊され現存しない。昭和61（1986）年史跡指定を受け、山形市が主体となり発掘調査並びに復原工事を進め、近世山形城の姿が復原されつつある。

#### (4) 検出された造構と遺物

範囲は「本丸東堀・東土塁地区」・「本丸南堀地区」・「二の丸旧霞城市民プール跡地区」・「二の丸旧霞城市民テニスコート跡地区」と呼ぶ。以下詳述する。

**本丸東堀・東土塁地区（120m<sup>2</sup>）：**平成17年度の本丸東土塁復原工事に先立ち行った調査で、東土塁裾部分に厚く堆積する遺物（崩落）包含層の採集と、土塁法尻部分の形態確認の目的で実施した。土塁裾部には、幅約2m・厚さ最大1mの三角堆積状の遺物（崩落）包含層を形成していた。今回調査した範

囲は、東土壘南端部より北仲約30mである。堆積土は、基本的に本丸堀内の腐植性堆積土（以下、発掘調査時の通称：H5層とする）が下層に位置し、その上部に土壘法面の崩落に由来する法面崩落砂礫堆積土（以下、同F層とする）が上層に位置する。包藏する遺物は、瓦類が殆どであり、かつ極めて多量である。最上層には植物が繁茂し、そのままの状態で明治期の堀埋没期を経たと考えられ、植物遺体が残存するほか、H5層が若干堆積したため殆どの瓦類は少なからず堆積土砂に覆われていた。土壘法尻には、部分的に護岸石垣が築かれていることが明らかとなった。最も顕著なのが東土壘の南端部から約10m北仲の範囲である。石垣は、拳大から人頭大の円錐ないしは扁平錐の河川石を基本とした。土壘法面の緩やかな勾配を断ち切るように積み上げられたもので、残存する部分では最高約100cm・平均約60cmの高さを有する。法尻の切岸に対し直接襷を貼り付けた状態であり、背面構造を伴わない。この遺構の前面には上述した遺物（崩落）包含層が堆積するため、それ以前の構造物であることは明らかである。しかし、石垣の構築時期等を示す共伴遺物はなく、遺物等から構築初期の推定は困難である。その機能としては、土壘法尻の保護が目的であろうと推測するが、遺構の状態からは堅固な構造物であるとは断定できない。その他、土壘の底面から法面への傾斜角は概ね40°（1割2分勾配）である。この勾配は、現存する二の丸土壘等との比較においてほぼ同様であり妥当性をもつ。土壘部の遺物包含層中より出土した瓦類は延べ重量で約6tになる。瓦類は極めて多量かつ重複して出土しており、堆積土層は大別して2層（H5・F層）あるが層序による瓦の差異は殆ど認められず、若干下層のH5層に古い時期に相当する瓦が含まれる割合が高い。瓦は2種（黒瓦・赤瓦）あり、概ね黒瓦から赤瓦へと変遷する。その時期は現時点では18C初頭と推測するが、本地区における瓦の出土割合は黒瓦が約9割・赤瓦が1割である。従って瓦類の崩落時期は江戸中期（8C代）にピークを求め、黒瓦から赤瓦への変遷過程を背景に黒瓦を主とする遺物を一括廃棄した可能性が高いと推測する。

**本丸南堀地区（15m<sup>2</sup>）**：本丸堀跡の復原整備にあたり、一文字門折形南面に位置する堀の二の丸側土羽の堀肩部分を確認する目的で行った試掘調査である。2地点を設定し、表層から遺構確認面までは重機使用による荒掘りを実施し、遺構確認面からは特に断面観察により堀肩を確認できる深さまでとし、2地点で堀肩部分を確認した。堀肩は、各々上面を現代に擾乱されていたので、本来の堀肩および二の丸郭表層等を確認したものではないが、断面観察により埋土層と地山層の境界を認識し、その境界が地面に対し平行となる地点を主として堀肩部と認識した。その結果、堀幅は堀口（グランドレベルの水平距離）で概ね27～28mを測り、東堀・南堀の既知の堀幅と比較すると、今回調査により把握した折形南面の堀幅もほぼ同様であることがわかった。試掘による遺物はない。

**二の丸旧霞城市民プール跡地区（75m<sup>2</sup>）**：二の丸北東部に位置する旧市民プール跡地の駐車場整備計画に伴い基本層と遺構の有無を確認する目的で行った試掘調査である。平成16年度に行った同地区第一次調査区北トレーンチ（A地区）の拡張調査である。層序は、表土擾乱層以下に暗褐色砂礫整地層（IIa'層）・黒褐色砂質整地層（IIb層）の順位を確認した。IIb層は平均層厚約80cmで、基本的には均質な砂質土である。下層は比較的堅く締まった粗砂粒を基質とした地山堆積層（III層）であり、IIb

層との間に自然堆積による漸移層は認められない。また、一部に溝跡（II SD05002）を検出したが、断面観察では掘込み面をⅡb層中に認め、Ⅲ層まで掘削が及んでいる。埋土はすべてⅡb層に由来する。

Ⅱa' 層は平均層厚約60cmで、黄褐色細砂・礫の互層状堆積層である。細砂は周辺の地山（Ⅲ層）に相当する川砂で、比較的細かく粘土質を思わせる質感をもつ。一方礫は河川礫（φ100～300mm）を極めて多量に含み、基質として黄褐色細砂を充填している状態である。上端部は擾乱が及んでいたため、本来の層厚は不明である。また、Ⅱb層とは時間的な断絶があることは明白で、しかも互層堆積の断面観察から、東から西へかけて堆積した傾向をつかむことができたことと、基質黄褐色の状況から天地返し的に周囲の地山層より盛られた可能性がある。本層は第1次調査で黒瓦を含む遺物包含層（Ⅱa層）と同等であることが判明したが、今次調査でも遺物出土がほとんど無く、特に赤瓦を伴わないことは、江戸期における時間帯を特定する重要な要素であり、かつ近代以降の遺物も確認はされなかったことから江戸時代中期以前の堆積層である可能性が高いことが判った。

今回の調査で出土した遺物は約300点に及ぶ。殆どがⅡb層中からの出土で、陶磁器が最も多い。その他鉄製品・砥石・硯・かわらけなどの日常品が出土する傾向は第1次調査と類似する。また、基石状円盤石製品・鉱滓も数点出土することと生活空間に密接な状況を窺わせる遺物の出土が目立つ。陶磁器は瀬戸美濃・唐津・信楽・伊万里等で帰属時期は概ね戦国～近世初頭の範疇である。

堆積層のⅡa'（近世初頭以降）層・Ⅱb（戦国～近世初頭）層の確認と帰属時期については概ね確認したが、現況の二の丸土星との整合性については充分ではなく、Ⅱa' 層が土壌埋土に連続する可能性を指摘するに留めたい。また、両次調査において溝跡2基を確認した。II SD04001・II SD05002 だが、互いに比較的近い位置で検出した。直接共伴遺物がなく帰属時期については不明だが、両溝跡ともにⅡb層により埋没していた特徴をもつ。近世以前の時期に帰属する可能性が高いと推測する。

二の丸旧霞城市民テニスコート跡地区（1,140m<sup>2</sup>）：二の丸南西部に位置する旧市民テニスコート跡地の公園整備計画に伴い基本層と造構の有無を確認する目的で行った試掘調査である。トレチを任意で7本（C～Iトレチ）設定した（第3図参照）。調査は基本的に表土層の掘削と造構確認面把握のための面積査であり、確認面上面より下位については一部のみ深掘りを実施して堆積土層状況の把握に努めた。また、記録は現況の表土から造構確認面までの土層堆積状況の把握に重点をおき、面的な造構の性格把握については必要最小限の調査に留めた。本丸西堀はCトレチで西端（二の丸側土羽法面）・Fトレチで南端（同左）を確認した。位置は本丸西堀と南堀の隅部である。Cトレチは既に調査進行している本丸南堀の延伸地点に設定した調査区で、土羽法面の確認までは現地表より約2m掘り下げた。FトレチはCトレチにて法面確認後追加した調査区である。上部はかなり擾乱されていたが法面確認位置より外側（二の丸郭側）では溝跡等の造構を確認したため、旧地表の高さが現況より下がる可能性も考えられる。

地域全体の層序については、表土以下旧テニスコートに係わる近現代整地層（I層）・近世整地層（II層c～g）・黒褐色砂質整地層（IIb層）の順位を確認している。IIb層確認面のレベルを見ると、

東浅西深の傾向を全体的に認めることができる。IトレンチにおけるIIb層の層厚は平均約80cmで、下層のⅢ層上面との漸移層の発達は顕著ではない。IIb層上面にいくつかの遺構を確認した。D-3区とよぶDトレンチ南部より溝跡（石組みを伴う）が確認された。直上には地山細砂を主体とする人為堆積層（IIf層）がある。溝跡は幅約30cmで、両岸部に拳大の円礫を2ないし3段で積み上げている。積み上げは直置きで背面構造を伴わない稚拙なものである。また、北端は調査区外に伸びるが、延伸方向のD-2区（Dトレンチ中部）では未確認である。また、その南端はこれも調査区外に伸びるが、途中で弧を描くようにトレンチ東壁に延伸する様相である。周囲には直径約1mの隅丸方形に近い土坑があり遺物を伴わないがIIf層が充填されていた。D-1区（Dトレンチ北部）では石積遺構を確認した。石は上記同様の安山岩玉石である。石はI層中にその頭部が露出していたようで、かなり浅い位置の構築物である。一部を断面観察した結果、石積遺構はやや貧弱だが背面構造（裏込）をもち、東向き面を正面としている。背面に相当する部分（石積構築の西側）はIIc層が堆積していたが、ここも断面観察では石積構築の構築面までは背面の土砂構造と石積構築は同時期・同一の普請跡であることがわかった。この遺構は位置的に本丸西堀に近く、確認レベルではD-3区溝跡検出IIb層面よりかなり高いことが窺われる。Cトレンチ・Eトレンチの西端部で、それぞれ深さ現地表より約3~4m以上ある溝跡を検出した。溝跡を横断する形で検出したが、溝底部分はいずれの地点でも深く未確認である。確認したのは溝跡の東側法面であるが、溝底同様西側法面も未確認である。したがって溝跡構築レベル（時代）の堀方幅で5mを超す。2地点はほぼ直線的な配置となることから同一の遺構である可能性が高い。溝跡の堆積土はIIb層と同質の黒褐色砂質土（IIc・IId層）で、同層由来の埋土であり、概ね東側法肩より傾斜堆積している状況を確認した。Cトレンチ法肩部には石積構築が認められる。安山岩の河川礫（φ300~500mm）を法面に平行に配置しており、位置をかえて概ね上下2段に構成している。その東部にはIIb層が認められるため、これを旧地表とする近世初頭に形成された溝跡と推測する。Iトレンチ南端部では、IIb層上面で現況の二の丸南土塁埋土に相当する人為堆積層を確認した。層中に地山Ⅲ層由来と考えられる黄褐色細砂の大きなブロック状土塊を含み、南土塁（南側）へ傾斜堆積する状況が窺えた。基底面はIIb層上面である。同トレンチはIIb層も掘削において下層にⅢ層黄褐色細砂を主体とする地山を確認しており、推定土塁埋土中の細砂ブロックの由来もおおよそ見当がつく状況である。二の丸（南）土塁がIIb層を基底面として形成されたことを示すものである。

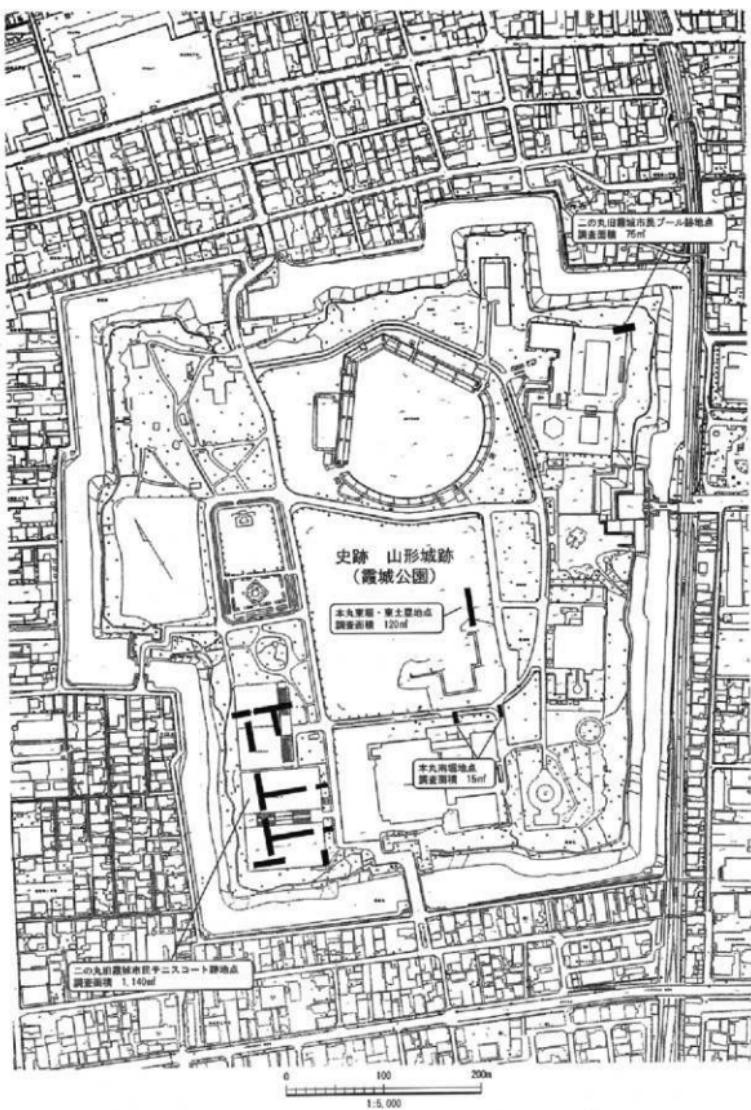
今回の調査で出土した遺物は約200点である（瓦片等を1点とした場合）。多数出土した瓦（II層に帰属する）を除くと陶器・磁器が最も多い。本地区の調査は断面観察・精査が主であったため遺物の帰属層序が判然としない例が多数あるが、II層出土瓦類が比較的短期間に製作・使用されたことが窺われ基本的にIIb層は戦国～近世初頭の範疇に収まるとして推定される。

本地区で縦層となるIIb層はブル跡地区と同色・質であり、旧表土と捉えられる。II層はIIb層の上位に堆積するが調査区全域に対して一様に分布する様相ではない。現状では、明らかな現代堆積土層をI層として分離する以外は、I~IIb層間に齊一的な旧表土を認識するには至らない。山形城の

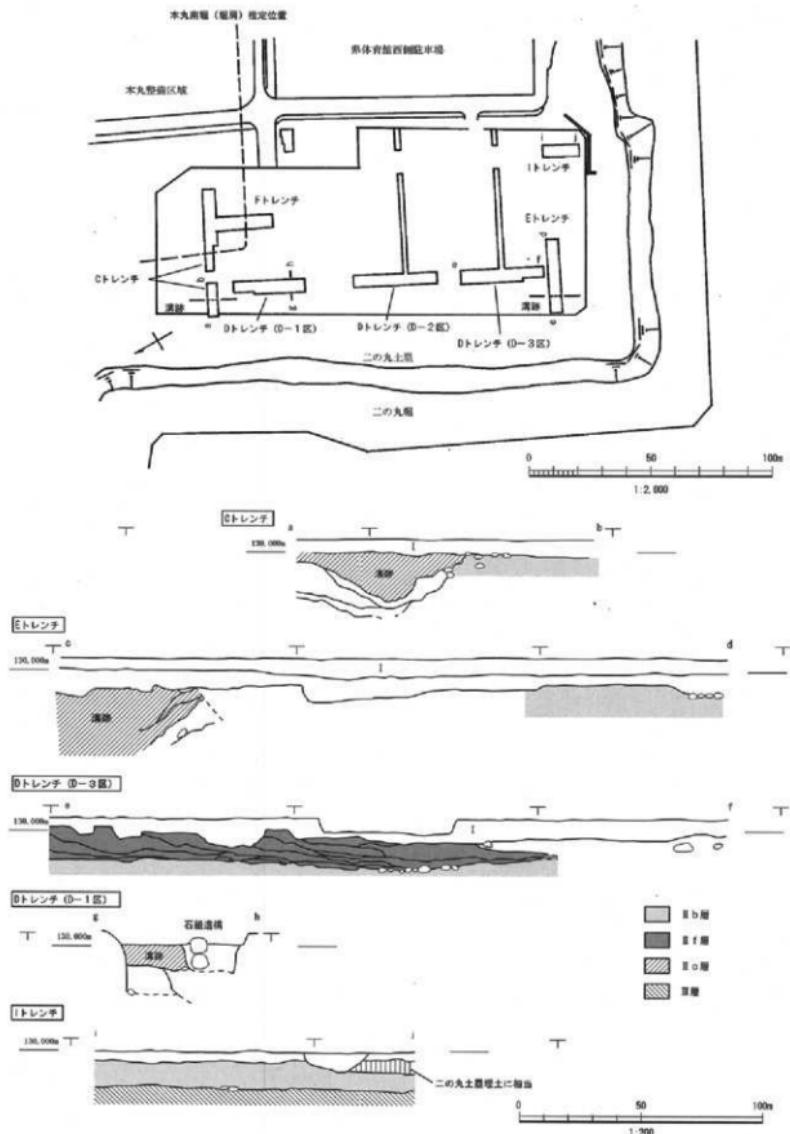
縄張り変遷は先にも述べたが、特に本丸・二の丸堀の位置の変化が古絵図から読みとれる。したがって、郭内には、最上時代の遺構が内包されることになるが、本調査区において検出した溝跡（C・Eトレーンチ）がそれに当たる可能性がある。

#### (6) まとめ

本丸では、土塁裾部に護岸石垣が検出され、土塁中段石積造構の基軸と土塁の基軸について差異があることが改めて明らかとなった。中段石積造構が段階的に古い時期の遺構である可能性が高くなつたことを示す。二の丸では、プール跡地・テニスコート跡地の両地区において旧表土Ⅱb層を確認したことと、同層の出土遺物が近世初頭をピークとした国産・輸入陶磁器であることと、瓦は黒瓦のみであることが特徴である。したがってⅡb層上面は近世中期以降生活面として機能していなかったことを示し、盛土・整地などにより生活面の造成が行われたことを示すものと考えられる。おそらく元和8（1622）年以降の改修に起因する可能性が高いと推測される。



第2図 史跡山形城跡平成17年度発掘調査位置図



第3図 史跡山形城跡二の丸旧霞城市民テニスコート跡地区調査位置・断面図

## 2 表面踏査・試掘調査・立会調査

### (1) 梅野木前1遺跡

梅野木前1遺跡は山形市街地の北西部、馬見ヶ崎川扇状地の前線帯に立地する。遺跡範囲は南北約200m、東西約180mの範囲に広がる。地目は水田・畑で、標高は北端で約105m、南端で約106mを測る。県道整備事業に係り、平成15・16年度に財団法人山形県埋蔵文化財センターによる発掘調査が行われている。

今回の調査は市道嶋西廻り線道路改良工事に伴い実施した。工事の工程上、事業地を東西に二分割しての調査で、事業地東側については平成17年10月に緊急発掘調査を実施し、同年度報告書を刊行している。また事業地西側は、対象地域が狭小で通常の発掘調査ができないことから、工事中に立会い、適宜必要な記録をとることとした。緊急発掘調査の成果は報告済のため、ここでは立会調査の成果について報告する。

立会調査は、上記事業に係る側溝工事箇所について平成18年1月12日、路床掘削箇所について同年3月10~11日に実施し、表土掘削に合わせ遣構・遺物の有無を確認した。

遺跡の層序は、耕作土層以下が黒褐色の遺物包含層、その下に黄褐色砂の地山となる。遺物包含層は耕作などによる削平のため部分的に確認される。調査の結果、本遺跡範囲の北半側について溝跡や柱穴などの遣構が検出され、須恵器や土師器、赤焼土器などの遺物が出土した。これらの遣構・遺物は平安時代のものと考えられる。遣構が検出された地点については適宜写真による記録をとり、遺物については取り上げを実施した。



第4図 梅野木前1遺跡調査概要図

## (2) 国指定史跡 島遺跡

島遺跡は昭和36～39年に発掘調査が行われ、昭和41年に国の史跡に指定された古墳時代後期の遺跡である。遺跡は奥羽山系から流下し山形市内を北西に貫流する馬見ヶ崎川の形成した扇状地の北西部に広がる平野部に位置し、標高は約104mを測る。周辺は現在島地区画整理事業の進捗により荒蕪地や宅地造成地となっている。過去の調査では古墳時代後期の土器類の他、多量の木製品及び建築部材が出土している。なお、本遺跡は関係機関との協議の結果、史跡指定範囲を含む34haを地区公園として利用し遺跡を保護することが決定している。

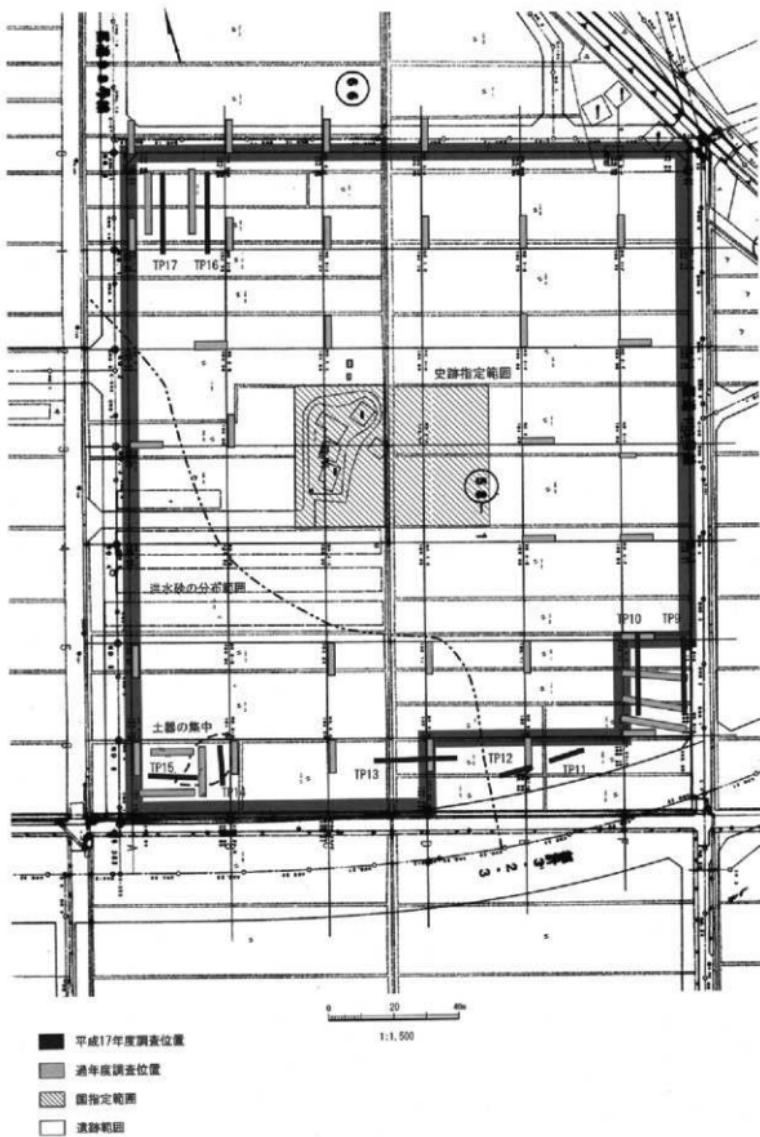
平成17年度の調査は地区公園内に設置する防火水槽計画地について実施したものである。今調査は昨年度と同一の原因として実施しているが、文化庁及び山形県教育委員会より詳細な調査を実施するよう指導を受けたためである。調査では過年度調査地点及び防火水槽設置予定箇所を勘査して遺跡の周辺部に9箇所の試掘坑（TP9～17）を設定し、重機により表土を除去し、その後人力により掘り下げ遺構・遺物の確認を行った。

調査の結果、TP9～12（遺跡の範囲外）では現代の耕作土中から微量の遺物が出土するのみで明確な遺構は確認されなかった。TP13（一部遺跡範囲内）及びTP14・15（遺跡範囲内）では現代の耕作土直下に洪水に起因する厚い砂層が確認され、その直下で水田畦畔が確認された。水田の時期を確認するため、砂層の精査、水田畦畔及び耕作土の断面観察を行った結果、TP14・15で確認された水田畦畔断面中及び水田耕作土の最下層から古墳時代後期の土器が出土した。またTP15砂層中から18世紀以降の陶磁器が出土した。よって、この水田は少なくとも古墳時代後期より新しく、また砂層出土遺物に拘り最終段階では江戸時代後期以降に經營されたものと判断される。この水田層より下層は未分解の植物を多量に包含する軟弱な粘土層となり、より古い遺構を確認されなかった。なお遺跡北西部に設定したTP16・17については水没のため詳細な調査を行うことが出来なかったが、表土除去段階では過年度同様遺構・遺物は全く確認されなかった。

以上のことから、TP9～12については過去の調査結果同様、遺跡の範囲外と判断される。TP13についてはその西側について遺跡の範囲内としていたが、今回の調査により遺跡の範囲外の可能性が高くなった。TP14・15については出土する遺物はかく乱されたものであり、検出された水田も近世以降のものと判断されるため、遺跡の範囲外となる可能性がある。しかしながら遺物の出土量が大量であることから、付近に遺構が遺存していることが予想された。

平成18年度になり関係機関との協議の結果、遺跡の範囲確認を目的とした調査を実施した。上記の水田畦畔は平成17年度同様の調査結果となり、近世以降の所産と判断された。また地区公園予定地南西隅の土器の集中部は、過去の地形図等から近代まで継続した農業用水路に当たることが確認された。その他の平成17度調査地点付近の様相も同様であった。

これらの調査結果から、平成17度調査地点については古墳時代に遡りうる遺構は存在せず、遺跡の範囲外若しくは縁辺部に当たると判断される。なお平成18年度調査の結果については平成19年度中に報告書を刊行する予定である。



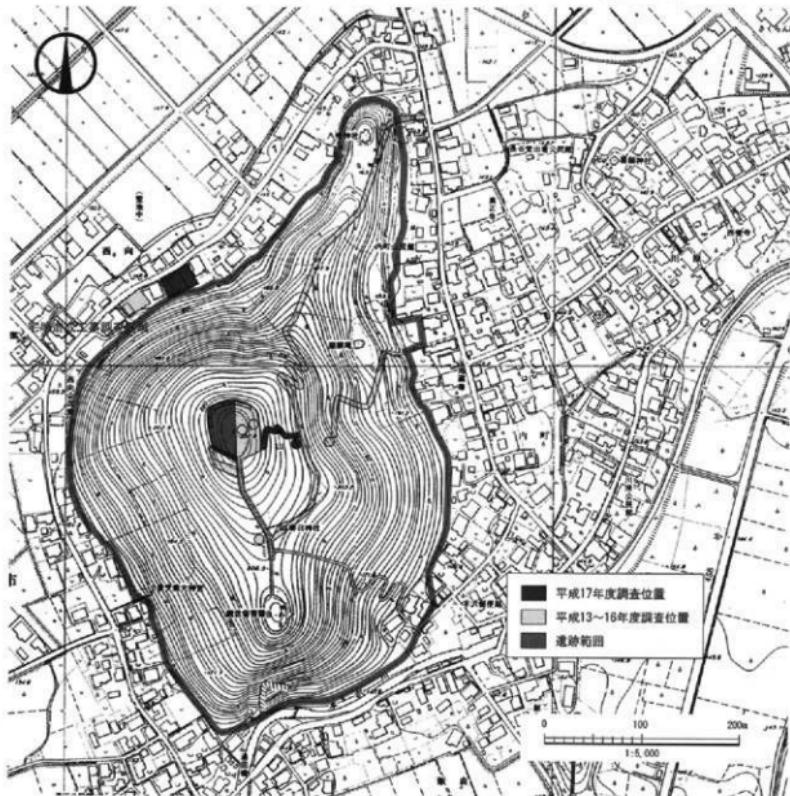
第5図 国指定史跡島遺跡調査概要図

## (3) 長谷堂城跡

長谷堂城は、山形市の南西部、大字長谷堂に位置する標高約200mの独立丘を利用して築城されている。慶長5年（1600）の出羽合戦において、最上義光と直江兼続率いる上杉軍の戦闘の際に文献記録に記載されている城館として著名である。往時は、丘の周囲を土塁及び水濠が囲んでいたと伝えられている。城郭の平面規模は、南北450m、東西350mの広さに及ぶ。

現在、山形市都市開発部公園緑地課が主体となり、市民の地域公園として活用を図ることを目的とした公園整備事業が進められている。これらの整備に伴い、平成17度は園路整備、広場へのウッドチップ敷設、隣接地での駐車場造成が行われることとなり、いずれも工事実施面積が狭小なため、工事の進捗に合わせて立会調査を実施した。

各工事箇所において掘削時に立会を行ったが、いずれの箇所からも遺構・遺物は確認されなかった。工事による掘削も軽微なもので、埋蔵文化財に対する影響は殆どないものと判断された。



第6図 長谷堂城跡調査概要図

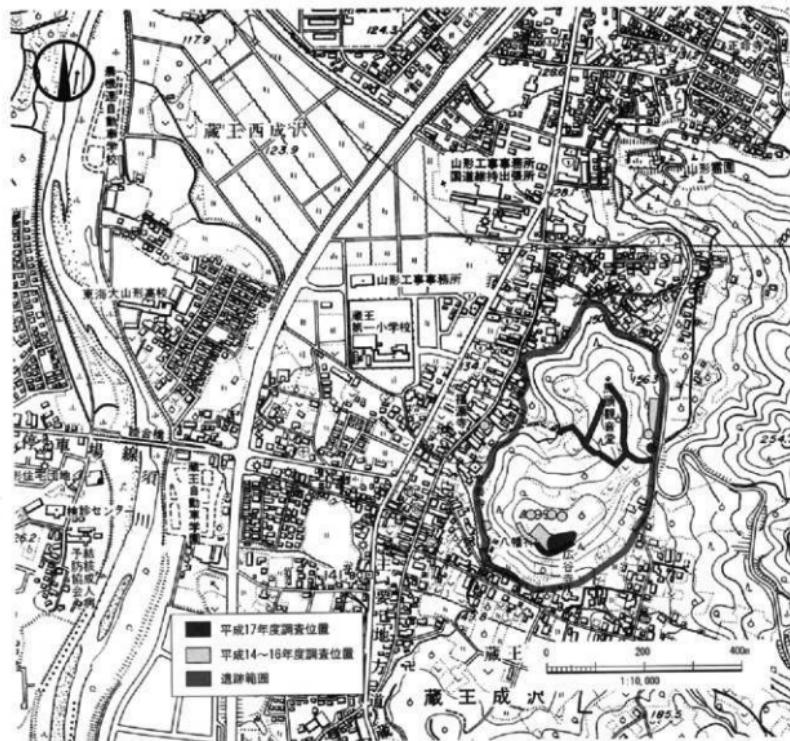
#### (4) 成沢城跡

成沢城は、山形市の南東部蔵王成沢地区に所在し、標高約200mの奥羽山脈裾野に立地している。城の西側を鳴沢川が流れ、現在も部分的に土塁や虎口が残存している。城郭の平面規模は、南北580m・東西350mの広さに及ぶ。

現在、山形市都市開発部公園緑地課が主体となり、市民の憩いと集いの場として活用を図ることを目的とした公園整備事業が進められている。

これらの整備に伴い、平成17年度は、園路整備、転落防止柵設置、広場へのウッドチップ敷設工事が行われることとなり、掘削工事の実施面積が狭小なことから、工事の進捗に合わせて立会調査を実施した。

各工事箇所において掘削時に立会を行ったが、いずれの箇所からも遺構・遺物は確認されなかった。また、工事による掘削も軽微なもので、埋蔵文化財に対する影響はほとんどないと判断された。



第7図 成沢城跡調査概要図

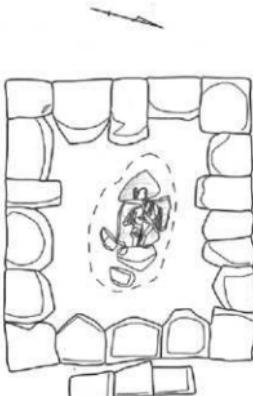
### (5) 秋葉山経塚

秋葉山経塚は、市南西部、松原地区に所在する。秋葉山と呼ばれる丘陵頂部に位置し、標高は約195mを測る。平成17年5月23日に山形市文化財保護審議委員宍木光裕氏より秋葉神社解体工事中に、旧社殿の基礎及び埋納されたと推定される不動明王像が確認されたとの連絡が市教委にあった。秋葉神社付近は、周知の埋蔵文化財包蔵地「秋葉山経塚」として登録されており、また、秋葉神社の下に過去に出土した秋葉山経塚の遺物が埋納されているとの伝承もあり、工事との調整に資する目的で調査を実施した。

検出された建物基礎は、長辺230cm、短辺200cmの規模を持ち、建物外面側を整形した自然石を一段方形に組んで構築されていた。それぞれ対面する石はほぼ同じ大きさの石材が選択され、また基礎の高さもほぼ水平となるように埋め込まれていた。その中心部に、不動明王像を埋納した長軸120cm、短軸70cmの規模を持つ土坑が確認された。土坑の堆積土は付近の地山と同一のものと判断され、また、非常に緩い状態であることから、この土坑は不動明王像を埋納する目的で掘られたものであり、埋納直後に、埋め戻されたと推定される。不動明王像は、光背部分には赤く彩色された炎の文様が彫られており、手に持つ刀には金箔が貼られた痕跡が残っていた。破損した状態で出土したが、顔面部分が削り取られタガネ状の工具を打ち込んだような痕跡が残るなど、人為的に打ち割られた可能性が高い。年号等の文字は確認できなかった。秋葉神社は、地元に残る記録では明和5(1768)年に創建され、今回解体した社殿は明治10(1877)年に再建したものとのことである。このことから、不動明王像は、明治10年の再建時以前に埋納されたと推定される。この制作年代については秋葉神社創建の年代から判断して18世紀中葉以降の作と思われるが詳細は不明である。予想された経塚に係る遺物は全く出土しなかった。



第8図 秋葉山経塚周辺遺跡位置図(1: 5000)



第9図 秋葉山経塚調査概要図

## (6) 城北遺跡・山形城三の丸跡（城北町二丁目9番地地点）

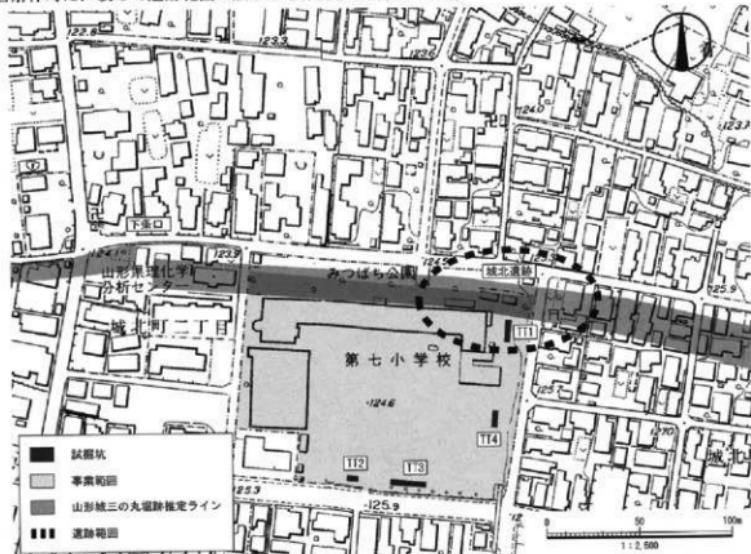
城北遺跡は、山形市立第七小学校敷地及びその北東に広がると推定される遺跡である。地形的には馬見ヶ崎川扇状地の扇端部に立地し、標高は約124.6mを測る。『山形県遺跡地名表』（山形県教育委員会 1963）によれば、「城北遺跡」として以前に古代の集落址として認識されていたが、平成17年度実施の試掘調査により新規登録された。また、七小敷地は山形城三の丸跡範囲北端にあたり、同校北側に隣接するみつばち公園は、三の丸跡の名残を埋め立てて造成されたと伝えられている。

試掘調査は山形市立第七小学校改築計画に伴い実施されたもので、事業地内に任意に試掘トレンチ（TT1～4）を設定し、重機により掘り下げ、その後人力により遺構・遺物の確認を行った。

結果、同校敷地の北東部のトレンチ（TT1）より奈良・平安時代の須恵器坏、甕や土師器坏、甕片などが出土し、土坑や溝跡などの遺構が確認された。近世の遺構は未確認だが、黒瓦片が出土した。

同校グラウンド部分でも試掘を実施した（TT2～4）。グラウンド部分は、周辺地形との高低差から判断して既に削平を受けていると思われ、遺構と判断される土色変化は確認されなかった。遺物は近代陶磁器片などが出土したのみであった。

以上の結果を受け、新校舎は現グラウンド部分に建設されることから、文化財保護法による届出を行い、慎重工事を実施するよう指示した。新規登録の、城北遺跡の範囲内と判断される現校舎部分については、グラウンド造成・外構工事など今後の工事内容が具体化した時点で再度調整を行うことになった。また、現校舎敷地内への試掘調査は不可能であったため、平成20年度に予定されている現校舎解体時に、改めて遺跡範囲の広がりを確認する必要がある。



第10図 城北遺跡・山形城三の丸（城北町二丁目9番地地点）調査概要図

## (7) 山形城三の丸跡（木の実町12番地地点）

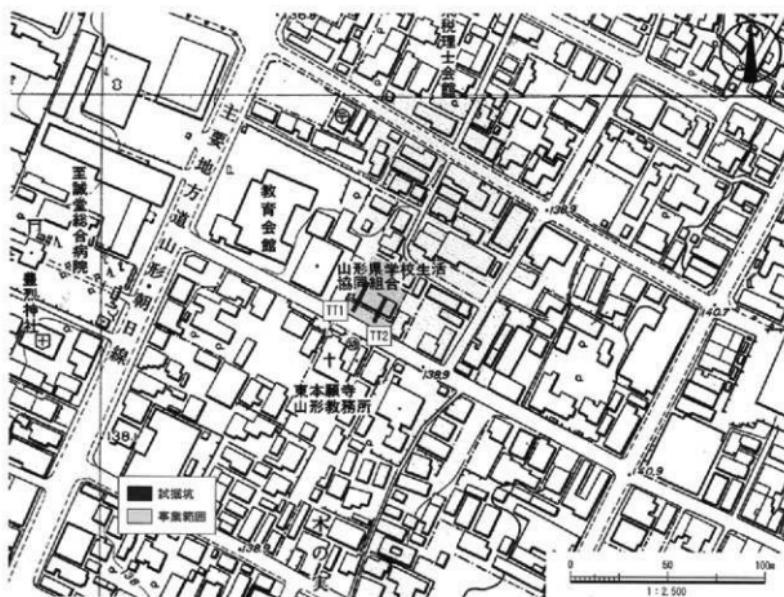
山形城は山形市街地の中央部に所在し、南北2.1キロ、東西1.6キロの規模に及ぶ。また、城下町として近世初頭から継続して都市街区が形成され、現在の山形市中心部都市計画の基礎となってきた。

当該区域は山形城三の丸の範囲内に位置し、東大手門の北東80mの位置に所在する。

調査はマンション建設事業に伴い実施したもので、事業地内に試掘トレンチを設定し、重機により掘り下げ、その後遺構・遺物の確認を行った。

結果、試掘調査を実施した箇所については、住宅を解体した後の更地の状態に試掘坑を任意に設定し、整地層を重機により掘り下げた。地表より13~15m前後の深さでにぶい黄褐色細砂を検出し、地山と判断したが、遺構と考えられる土色変化は確認されなかった。その上層の黒褐色シルト層から、かわらけと判断される素焼きの土器が3点確認されたが、層位的には近代以降の陶磁器と共に伴し、後世に搅乱された層位からの出土と判断した。

よって、当事業地における埋蔵文化財に対する影響はほとんどないものと考えられ、文化財保護法による届出を行い、慎重工事を実施するよう指示した。



第11図 山形城三の丸跡（木の実町12番地地点）調査概要図

## (8) 山形城三の丸跡（幸町7番15号・幸町18番地地点）

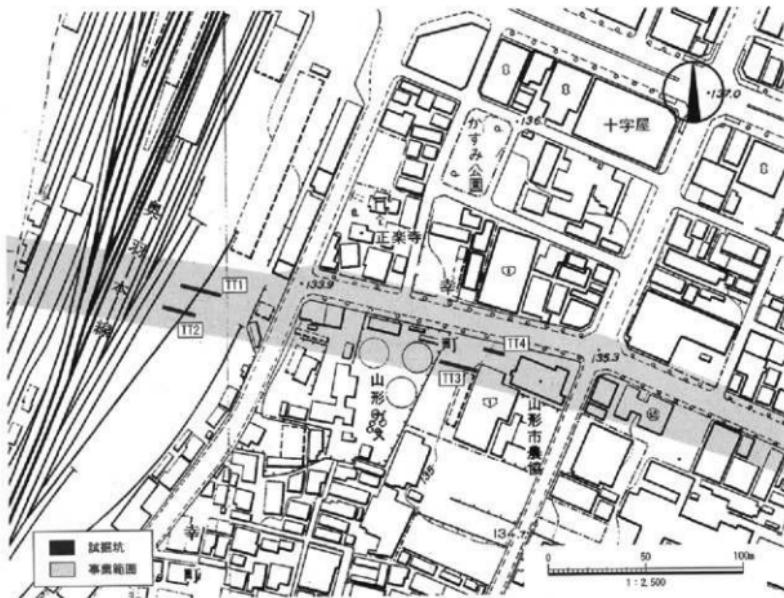
山形城は山形市街地の中央部に所在し、三の丸の範囲は南北約2.1キロ、東西1.6キロの規模に及ぶ。また、城下町として近世初頭から継続して都市街区が形成され、現在の山形市中心部都市計画の基礎となってきた。

当該区域はJR山形駅の南東100mの位置に所在する。山形城三の丸の範囲内、吹張口付近に位置する。また、北に天台宗寺院の正楽寺が隣接する。同寺は最上家段階の絵図によれば、山形城の範囲内で今まで唯一位置を変えずに所在している寺院と伝えられる。

調査は都市計画道十日町・双葉町線敷設事業に伴い実施されたもので、既に公有地化がなされている2箇所の地点について任意に試掘坑を設定し、その後遺構・遺物の確認を行った。

結果、試掘調査を実施した箇所については、表土直下約90cmの深さまで近現代の整地層が続き、下に更に90cmの厚さで均質な黄灰色シルトが堆積、その下層に灰白色粗砂層が検出された。灰白色粗砂層を地山層と判断した。いずれの層でも、遺構と考えられる土色変化は確認されなかった。また上層を含めても、土器・陶磁器などの遺物は全く検出されなかった。

のことから、当該区域における埋蔵文化財に対する影響はほとんどないものと判断された。当該区域における埋蔵文化財の発掘調査は不要と判断された。



第12図 山形城三の丸跡（幸町7番15号・幸町18番地地点）調査概要図

### (9) 鉄砲町一丁目遺跡

鉄砲町一丁目遺跡は、山形市街地の南部、JR山形駅から南へ2kmに位置する。標高は約135mを測り、馬見ヶ崎川の扇状地扇央部に立地する。南に六櫓觀音が隣接し、さらに南に500m離れた位置に山形西高敷地内遺跡（山形県遺跡番号29）が所在する。平成17年度に実施した試掘調査により新規に発見された遺跡である。試掘調査時の地目は畠地である。

試掘調査は、個人による集合住宅建設に伴い、土地所有者の依頼により実施されたものである。開発計画に基づき、事業地内の可能な箇所に試掘坑（TT1～2）を設定し、重機により掘り下げ、その後造構・遺物の確認を行った。

結果、現況畠地の耕作土を掘り下げ、現地表から約1mの深さで、にぶい黄褐色シルトの、地山と判断される地層を確認した。掘削した面を精査したところ、ピット群や溝状の造構が確認され、9世紀代と推定される須恵器・土師器・赤焼土器などの遺物が検出された。

以上の調査結果をふまえ、遺跡の新規発見の通知を行った。

なお、開発計画による建築物は、試掘の結果を参考とし、建物基礎の掘削深度が造構検出の深さまで達しない設計内容であったことから、文化財保護法による届出を行い、工事実施時に立会調査を実施する旨を指示した。



第13図 鉄砲町一丁目遺跡調査概要図

## 00 谷柏古墳群

### 1 調査の経緯

谷柏古墳群は、市南西部、白鷹丘陵から北東に張り出した丘陵端に位置する。A～C地点の3地点に分かれて区別されており、指定史跡となっているのはB地点と呼称される区域である。今回調査を実施したのはA地点と呼称される区域で、B地点の北西の峯の頂部に位置する。平成16年度はB地点について測量調査を実施したが、その際A・B地点の実測図等の混乱が見られた。その後平成16年度文化財保護委員会において報告を行ったところ、再調査するよう意見が出された。そこで平成17年度はA地点について表面踏査を実施した。

### 2 調査の目的及び方法

過去の調査記録から推測されるA地点について表面踏査を実施し、墳丘らしき痕跡の確認を行つた。平成17年10月17日に調査を行い墳丘らしき地形の高まりを確認したが下草等の影響で詳細な観察が出来なかった。そこで草木が枯れるのを待ち同年12月7日に再度踏査を実施した。なお、調査の際には茨木光裕（山形市文化財保護委員）の協力を得た。

### 3 調査概要

地形は戦後の開墾作業によりかなりの改変をうけており斜面は畑作等のため階段状になり、丘陵鞍部は葡萄畠となっていた。丘陵鞍部及び東北斜面を中心に踏査を実施した結果、墳丘の可能性がある6箇所の地形の高まりを確認した。仮に墳丘A～Fの呼称を与え、以下その状況を記す。

**墳丘A**：東斜面に位置し、菜畠となっている。径約20m。裾付近は開墾により削られている。

**墳丘B**：丘陵北東突端に位置し、雑木林となっている。上面が開墾のため削平を受けているようであるが、墳丘築造時の掘削痕と推定される落ち込みが、丘陵鞍部側に残る。径約20～25m。

**墳丘C**：丘陵鞍部、農道東側の葡萄畠内に位置する。かなり削平を受け均されているが、径20m程度の規模を持っていたと推定される。付近に石棺の残欠と推定される板状の石が認められる。

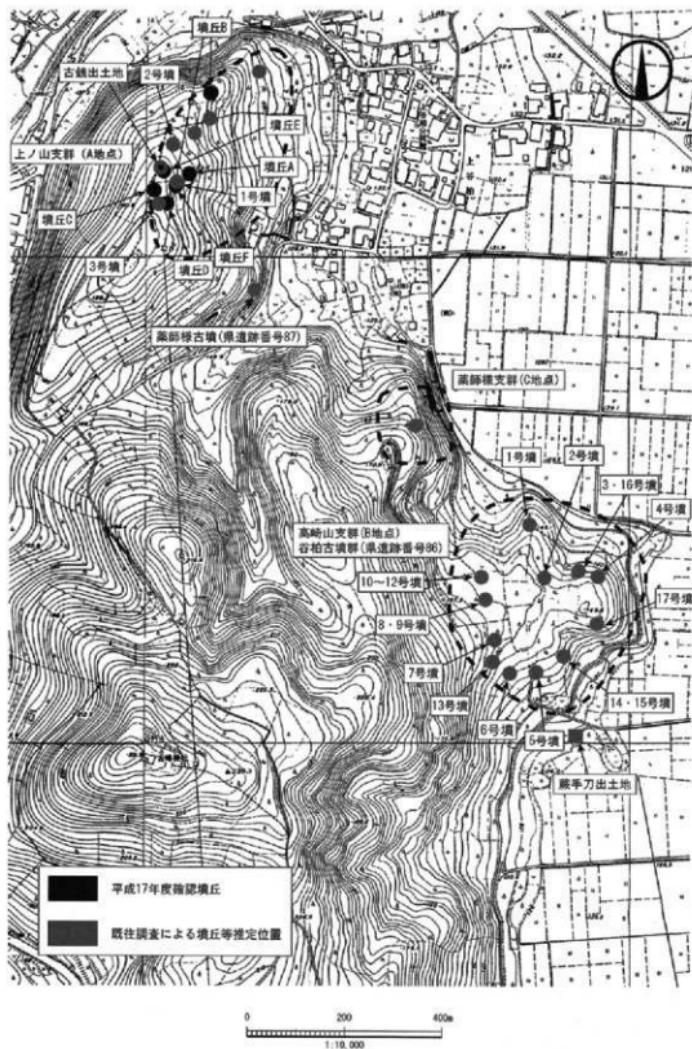
**墳丘D**：墳丘Cの南東に位置する。葡萄畠内にあり、かなり削平を受け均されているが、径20m程度の規模を持っていたと推定される。

**墳丘E**：墳丘Cの北東に位置する。葡萄畠内にあり、かなり削平を受け均されている。特に北半分がほぼ完全に壊滅している。付近に石棺の蓋石と推定される板状の石が認められる。径20～25m程度の規模を持っていたと推定される。

**墳丘F**：墳丘Dの北東に位置する。上記の墳丘に比べ、削平の度合いが大きく、墳丘でない可能性もある。径20m程度か？

### 4 調査結果

上記のように墳丘と推定される地点が6箇所確認され、その一部には付近に石棺と推定される石材が点在していた。墳丘A・F・C・Dは、谷柏古墳群A地点の1・3号墳のいずれかに相当する可能性があるが、過去の調査時における位置図が略測図であることから同定することは出来なかつた。また、今回確認できた墳丘状の地形についても、今後地形測量等の調査を行い、古墳かどうかの確認を行う必要がある。



第14図 谷柏古墳群墳丘位置図

## 付録 山形県山形市山形西高敷地内遺跡出土試料の<sup>14</sup>C年代測定

小林謙一・坂本稔・新免歳靖（国立歴史民俗博物館・年代測定研究グループ）

武田和宏（山形市役所）

松崎浩之（東京大学大学院工学系研究科）

### 概要

山形県山形市山形西高敷地内遺跡から出土した資料について加速器を用いた年代測定を行ったので、その結果を報告する。試料の採取は、2003年度に武田和宏が持参した土器片から、国立歴史民俗博物館において小林謙一が採取した。資料の所属土器型式は、その後に刊行された報告書（山形市2004）に従う。採取は、2点の土器付着物を採取し、2点とも年代を測定することができた。

試料の前処理は、国立歴史民俗博物館で年代測定研究グループが行い、測定は（株）パレオ・ラボ社および東京大学によるものである。測定結果は計測値（補正）とともに実年代の確率を示す較正年代値を示した。また、その根拠となった較正曲線を示した。

この年代測定の考古学的目的は、山形西高敷地内遺跡の年代を調べることであるが、同時に縄文時代中期末葉～後期初頭の土器の実年代を推定していく上で有効な測定結果を得ることができた。本稿は、補注1を新免、補注2を坂本、その他を小林が執筆した。

### 1 採取試料と炭化物の処理

表1に示す土器付着物を採取し、補注1に示す手順で試料処理を行った。(1)前処理の作業は、国立歴史民俗博物館の年代測定資料実験室において小林・新免、(2)燃焼と(3)グラファイト化の作業は、YGYN-19は（株）パレオ・ラボ社に委託した。YGYN-17は年代測定資料実験室において坂本が行った。

### 2 測定結果と層年較正

AMSによる<sup>14</sup>C測定は、YGYN-19は（株）パレオ・ラボ社（機関番号PLD-1）に委託した。YGYN-17は、東京大学大学院工学系研究科において標準試料とともに東大松崎浩之・歴博坂本稔が測定した。測定結果については、補注2に示す方法で、補正し、較正年代を計算した。

### 3 測定結果について

YGYN-17については、（株）昭光通商に委託して、安定同位体比質量分析計でδ<sup>13</sup>C値を測定した。その結果、-27.9%と通常の陸生植物である可能性が高い。同時に、窒素同位体比と、炭素/窒素含有比を調べた結果、δ<sup>15</sup>N3.9%、C/N比167.5となり、分析した炭化物が植物に由来すると考えて矛盾ない結果であった。

暦年較正年代についてみると、YGYN-17（報告52）は、較正年代で紀元前2700-2560年に含まれる可能性が62%で最も高い結果を得た。YGYN-19は、較正年代で紀元前2490-2340年に含まれる可能性が92%で最も高い結果を得た。これまでの測定結果に照らす（小林2004・小林他2005）と、関東地方加曾利E4式の年代であり、大木9~10式に相当する。YGYN-17は最も高い確率密度では加曾

利E3式後半で大木9式～大木10式小段階に相当するが、確率密度では紀元前2535～2490年に含まれる可能性も10%あり、中期末葉加曾利E4式・大木10中段階に相当する可能性もある。YGYN-19（報告51）は加曾利E4式末期～後期称名寺I式に相当し、大木10式新段階にかかる可能性がある。大木10式後半段階については、福島県馬場前遺跡、前山遺跡、町B遺跡の土器付着物・炭化材の測定結果などから（小林2004ほか）、後期初頭称名寺I式に平行すると考えられる。今後、測定例を増して検討していく必要がある。

この分析は、試料の採取において国立歴史民俗博物館 平成13～15年度科学的研究補助金基盤研究（A-1）「縄文時代・弥生時代の高精度年代体系の構築」（研究代表 今村峯雄 課題番号13308009）、測定について平成16年度科学的研究費補助金（学術創成研究）「弥生農耕の起源と東アジア－炭素年代測定による高精度編年体系の構築－」（研究代表 西本豊弘 課題番号16GS0118）、結果の解釈において平成17年度科学的研究費補助金（C）「AMS炭素14年代を利用した東日本縄紋時代前半期の実年代の研究」（研究代表 小林謙一）の成果を用いている。

層年較正については今村峯雄・坂本稔の方法に従う。本稿を草するに当たり、西本豊弘ら国立歴史民俗博物館年代測定研究グループに多大な教示を頂いた。

#### ＜補注＞

(1)前処理：酸・アルカリ・酸による化学洗浄（AAA処理）。

AAA処理に先立ち、土器付着物については、アセトンに浸け振とうし、油分など汚染の可能性のある不純物を溶解させ除去した（2回）。AAA処理として、80°C、各1時間で、希塩酸溶液（1N-HCl）で岩石などに含まれる炭酸カルシウム等を除去（2回）し、さらにアルカリ溶液（1N-NaOH）でフミン酸等を除去した。アルカリ溶液による処理は、3回行い、ほとんど着色がなくなったことを確認した。さらに酸処理（1N-HCl 2時間）を2回行いアルカリ分を除いた後、超純水により洗浄した（4回）。

(2)二酸化炭素化と精製：酸化銅により試料を燃焼（二酸化炭素化）、真空ラインを用いて不純物を除去。

AAA処理の済んだ乾燥試料を、500mgの酸化銅とともに石英ガラス管に投じ、真空中に引いてガスバーナーで封じ切った。このガラス管を電気炉で850°Cで3時間加熱して試料を完全に燃焼させた。得られた二酸化炭素には水などの不純物が混在しているので、ガラス製真空ラインを用いてこれを分離・精製した。

(3)グラファイト化：鉄触媒のもとで水素還元し、二酸化炭素をグラファイト炭素に転換。アルミ製カソードに充填。

1.5mgの炭素量を目標に二酸化炭素を分取し、水素ガスとともに石英ガラス管に封じた。これを電気炉でおよそ600°Cで12時間加熱してグラファイトを得た。ガラス管にはあらかじめ触媒となる鉄粉が投じてあり、グラファイトはこの鉄粉の周囲に析出する。グラファイトは鉄粉とよく混合した後、穴径1mmのアルミニウム製カソードに600Nの圧力で充填した。

## &lt;補注2&gt;

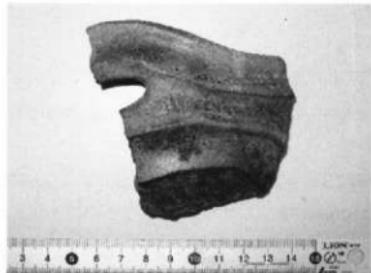
年代データの<sup>14</sup>CBPという表示は、西暦1950年を基点にして計算した<sup>14</sup>C年代（モデル年代）であることを示す。<sup>14</sup>C年代を算出する際の半減期は、5,568年を用いて計算することになっている。誤差は測定における統計誤差（1標準偏差、68%信頼限界）である。

AMSでは、グラファイト炭素試料の<sup>14</sup>C/<sup>12</sup>C比を加速器により測定する。正確な年代を得るには、試料の同位体効果を測定し補正する必要がある。同時に加速器で測定した<sup>14</sup>C/<sup>12</sup>C比により、<sup>14</sup>C/<sup>12</sup>C比に対する同位体効果を調べ補正する。<sup>14</sup>C/<sup>12</sup>C比は、標準体（古生物belemnite化石の炭酸カルシウムの<sup>14</sup>C/<sup>12</sup>C比）に対する千分率偏差  $\delta^{14}\text{C}$ （パーミル、‰）で示され、この値を-25‰に規格化して得られる<sup>14</sup>C/<sup>12</sup>C比によって補正する。補正した<sup>14</sup>C/<sup>12</sup>C比から、<sup>14</sup>C年代値（モデル年代）が得られる。 $\delta^{14}\text{C}$ 値については、加速器による測定は同位体効果補正のためであり、必ずしも<sup>14</sup>C/<sup>12</sup>C比を正確に反映しないこともあるため、（株）パレオ・ラボ測定分については、加速器による測定を参考として〇で付す。YGYN-17については、前処理した試料を分取して（株）昭光通商に委託し、安定同位体比を質量分析計で測定している。

測定値を較正曲線IntCal04 (<sup>14</sup>C年代を曆年代に修正するためのデータベース、2004年版) (Reimer P et al., 2004) と比較することによって曆年代（実年代）を推定できる。両者に統計誤差があるため、統計数理的に扱う方がより正確に年代を表現できる。すなわち、測定値と較正曲線データベースとの一致の度合いを確率で示すことにより、曆年代の推定値確率分布として表す。曆年較正プログラムは、歴博で独自に開発したプログラムRHcal (OxCal Programを応用した方法) を用いる。統計誤差は2標準偏差に相当する、95%信頼限界で計算した。年代は、較正された西暦(cal BC)で示す。〇内は推定確率である。図は、各試料の曆年較正の確率分布である。

## &lt;参考文献&gt;

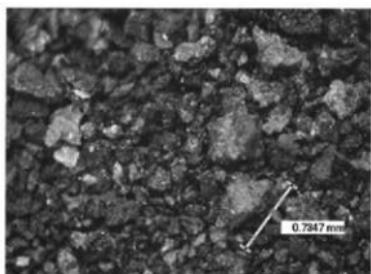
- 今村峯雄2004『課題番号13308009基盤研究(A・1)(一般)縄文弥生時代の高精度年代体系の構築』  
 (代表今村峯雄)
- 小林謙一2004『縄紋社会研究の新視点—炭素14年代測定の利用—』六一書房
- 小林謙一・坂本穏・尾崎大真・新免歳靖・松崎浩之2005「福島県郡山市内遺跡出土試料の<sup>14</sup>C年代測定」  
 『町B遺跡』郡山市埋蔵文化財発掘調査事業団
- 山形市教育委員会・山武考古学研究所2004『山形西高敷地内遺跡』山形県山形市埋蔵文化財調査報告書第18集
- Reimer, Paula J. et al., 2004 IntCal04 Terrestrial Radiocarbon Age Calibration, 0 – 26 cal kyr BP  
 Radiocarbon 46(3), 1029-1058



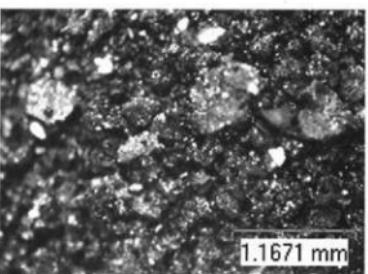
YGYN-17 外面付着状態



YGYN-19 外面付着状態



YGYN-19 前処理前 約22倍



YGYN-19 前処理前 約22倍

表 1 測定用採取試料一覧

試料番号	出土区	種類	土器部位	時代	結果
YGYN-17	2005.3K.L.5グリッド,VII層	土器付着物	口縁外	縄文中期大木10式	測定
YGYN-19	2005.2K.R.3グリッド,VII層	土器付着物	口縁外	縄文中期大木10式	測定

表 2 試料の重量と処理状況

試料番号	採取量mg	処理量ng	保存量mg	回収量mg	回収/処理	燃焼量mg	CO <sub>2</sub> (炭素量)	含有率	CO <sub>2</sub> 量/処理
YGYN-17	96.73	38.94	57.79	16.63	42.7%	298	2.1	70.5%	30.1%
YGYN-19	51.29	43.85	7.44	4.74	10.8%	169	3.2	52.8%	5.7%

表 3 測定結果と暦年代較正年代

試料番号	測定機関番号	測定年	炭素年代 δ <sup>14</sup> C‰	<sup>14</sup> C BP (補正値)	暦年較正cal BC	2σ (%)は確率密度
YGYN-17	MTC-07588	-27.8		4080 ± 35	2860 - 2810	16.6%
					2755 - 2720	5.9%
					2700 - 2560	62.7%
					2535 - 2490	10.2%
YGYN-19	PLD-4467	(-27.9 ± 0.13)		3930 ± 25	2545 - 2540	0.8%
					2490 - 2340	92.7%
					2320 - 2305	2.0%

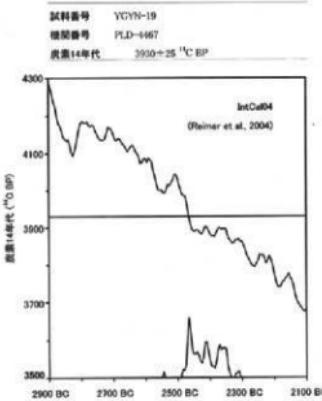
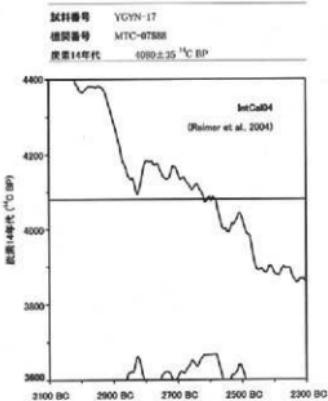


図 較正年代確率密度分布

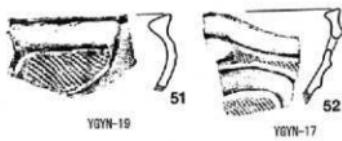


図 測定試料付着土器 S=1/4 (山形市教委ほか 2004より)

---

**山形市埋蔵文化財調査年報  
平成17年度**

2007年3月30日発行

発行 山形市教育委員会

〒990-8540 山形市旗籠町二丁目3番25号

TEL023-641-1212

印刷 口口二一印刷(山形福祉工場)

〒990-2322 山形市桜田南1-19

TEL023-641-1136

---